

第3回 AI社会実装アーキテクチャー検討会 議事概要

2020年10月23日 10:00-12:00

- **ガイドラインでは、AIの利活用を促進させるインセンティブの提示が重要だ。**
 - AIの多様性・利活用、イノベーションを阻害しないという観点から、非拘束の中間的なガイドラインとしての位置づけはよいと考えている。一方でエンフォースメントがないとなると、利活用を広げるインセンティブが必要と考える。保険業界でも、損害保険手配の際のリスク評価の加点などがある。

- **ステークホルダー・エンゲージメントの観点を取り入れた検討をすべきではないか**
 - 特にB2Cに関してはステークホルダーに対するガバナンスの対応状況の開示、ステークホルダーコミュニケーション・エンゲージメントが普及促進に資するのではないか。ゴールベースで考えたとき、守りだけでなく、いかに価値創造につなげていくかのバランスが大事。そういった意味では、説明責任の流れの拡大にあたる、ステークホルダー・エンゲージメントの観点を入れていくのが大事なのではないか。
 - AIスタートアップでAIサービスを個社で展開するケースは少ないのではないかと考えているため、個社単体ではなく、コミュニティーでアライアンスを組んだバリューチェーンとしての担保を確認していると説明できれば、マーケットとしては安心できるのではないか。

- **ガイドラインの目的や位置づけを分かりやすく記載すべきではないか。**
 - 非拘束的なものという方向感に関しては同意しているが、ガイドラインを出すことによって解決したい課題は具体的には何か、また報告書はどう使われていくのか、どういった目的で何が達成されるべきなのかイメージできていない。
 - ガイドの作成目的が読み手に伝わることで問題意識も明確になると考えられる。

- **非拘束的なガイドとしつつも、想定ケースごとの対応チェックリスト等を作成すべきではないか。**
 - マーケットを見ると、産総研の報告書だけでは実態として企業は動いていないと感じる。企業が動くためには、どういったプロセスで何を考えればいいのかを示さなければ、利活用がドライブされていかないのではないか。想定ケースに対応したプロセスや方法を示すようなガイドラインが必要なのではないか。
 - AIを活用する側がどうリスクを定量化するかというプロセスを明示する事が必要なのではないか。現場では、拘束的なチェックリストはやめてほしいが、チェックシートは作ってほしいという声も聴く。
 - 考えず、丸飲みしたいからチェックリストを欲しいという企業もいる。ぱっと使いたい人と、要点を理解し、カスタマイズしたい人を両立していけるようなソフトルールの策定を進めるべきだ。

- **複雑になりつつあるサプライチェーンと、大手企業とスタートアップの関係性について考慮してガイ**

ドを作成すべき。

- AI を活用したシステムは旧来、スタートアップや大手企業一社単体でのサービス展開であったが、最近は関係が複雑なケースが増えている。最近では、AI の議論が進む中で、大手が関心を高めると同時に、大手企業の中でチェックリストを検討してスタートアップに押し付けるケースも目に見えている。またスタートアップに、世の中の一般的なペーパーに対応するエビデンス（どういった開発をしたのか等）を抽象的に求める事が発生している。そのケースでは、スタートアップも何をしたらいいのか分からず、相当な工数がかかっている。報告書をまとめていく際に、複雑になりつつあるサプライチェーンと、大手企業とスタートアップの関係性について考慮していただけると、イノベーションを阻害しない、促進するガイドラインになるのではないか。
- **コーポレートガバナンスの視点で日本型の経営システムの強みを探り、それをガイドに反映させる方針はどうか。**
 - ケンブリッジ大学のコーポレートガバナンスの研究者の Simon Deakin 先生は、昨年、コーポレートガバナンスの在り方として、日本型の経営システムは AI 時代にむしろ頑健ではないか、という提言をしている。コーポレートガバナンスの視点がかえって日本の強みになりえて、それをガイドに反映する道を探るのはどうか。

以上